

# ■ 2026年度 入試問題分析シート ■

東京大学

文科(前期)

科目	数学
----	----

総括

試験時間	100分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	80点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

<総論>

難度が高く作業量も多かった昨年よりも取り組みやすいセットになり、昨年と比べれば易化したといえよう。これで十分に数学の実力差が反映されるであろう。大問1題のみ小設問に分かれておらず、大問3題が細かい設問に分かれている形式は昨年と同様であった。全く手がつけられないような問題はなく、特に第1問をしっかり完答することが肝心であろう。今年も場合分けを要する問題があり、パターン思考では誤りやすい問題も含まれている。計算ミスにも注意して丁寧に最後まで答案を書きあげることが重要になる。数学が不得手でも2題分の得点は確保したいところであり、得意であれば3題以上の完答も可能であろう。内容的には、伝統的に頻出の話題・分野である数Ⅱの微分・積分、確率、数列、図形と式等が出題された。

<特記事項・トピックス>

東大文科では数学Ⅱの微分積分に絡む問題が必出であり、今年も第1問・第4問で出題されている点は昨年とまったく同様である。

理科との共通問題が1題、ほぼ共通の問題が1題とあり、3年ぶりに共通問題が復活した。

2年前まで続いて出題されていた立体・空間図形に関する問題は昨年と同様に問題が出題されなかった。

<合格への学習対策>

類型化された問題をきちんと解ききり、論理的に記述する学力を養成することは前提として、手を動かしながら問題を深く考え抜くことを通してその本質をつかむ訓練を積み重ね、思考力・応用力を培うことが重要である。同時に、方針の見通しが立てられた問題については、確実に結果を導出するための計算力や表現力も必要である。質と量の両面における数学力の研鑽が肝要なのである。駿台のテキストおよび過去問の徹底した研究は有効な対策となろう。

## 設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
1	記述	Ⅱ Ⅱ	微分法 積分法	放物線 $C: y = k(x - \alpha)(\beta - x)$ の頂点と $y$ 切片の条件が与えられているときの、 $C$ と $x$ 軸の囲む部分の面積 $S$ の値域を求める問題。 $S$ を $k$ の関数で表すことと $k$ の変域を押さえることがポイントになる。	易
2	記述	A	確率	平面上の長方形に並んだ $3n$ 個の格子点から 3 点を選んで三角形ができる確率を求める問題。余事象を考えれば容易に解決に向かう。(文理共通問題)	やや易
3	記述	I	2次関数	2次関数のグラフと折れ線のグラフの共有点の個数を考察する問題。(1)を示せば、(2)は調べる $x$ の区間が限定され、各区間において放物線と直線の共有点の個数を丁寧に調べるだけである。結局2次方程式・2次不等式の問題にすぎない。	標準
4	記述	Ⅱ Ⅱ Ⅱ	微分法 三角関数 図形と式	3次関数のグラフの3本の接線で正三角形を作る条件とその面積の最大最小に関する問題。なす角の条件を傾きと $\tan$ で捉えるのが通常である。交点の座標がきれいに表されることにも注目するとよい。(文理類似問題)	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階【難・やや難・標準・やや易・易】で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。